点字通信第12号

群馬県立盲学校　点字係
令和６年５月３１日（金）発行

点字ICT って何？

　携帯型の点字電子機器を見かけたことはあるけれど、実はよく知らないという方も多いのではないでしょうか？ そこで今回は、点字ICTの中でもメジャーなブレイルセンスとブレイルメモについて取りあげます。

　点字ICTのうち、点字電子手帳、あるいは複合型点字情報端末と呼ばれるこれらの機器の一番の特徴は、6点入力用キーボードと、下部にある点字ディスプレイです。6つのピンがそれぞれ独立して出たり引っ込んだりすることで、凹凸を作り、点字を表示します。標準点字盤と同じ1行32マスの点字ディスプレイがついたサイズと、持ち運びに便利なように、それより一回り小さくしたものが発売されています。音声ガイドも内蔵されているので、点字には不慣れだけれど、読み書き能力を向上させたいというユーザーにも安心な設計となっています。

　どちらの機器も点字の読み書きが機能の中心です。点字文書の作成や編集のほか、ワードやエクセルのファイルも読めるようです。（機種により、別途拡張有料ライセンスが必要）デイジー図書や音楽の録音・再生機能、時計、タイマー、スケジュール、電卓などの機能もあります。また、パソコンの点字ディスプレイとしての利用もできます。

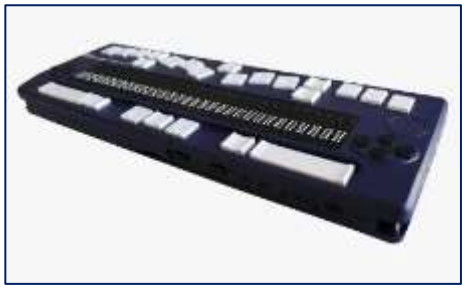
　点字電子機器は日常生活用具の給付対象商品ですが、自治体によって異なる場合がありますので、市役所等で確認が必要です。

ブレイルセンスとブレイルメモ

　ブレイルセンスとブレイルメモの大きな違いは、メーカーとキーの数、そしてWi-Fi接続の有無です。

　ブレイルメモは、点字ディスプレイや点字ラベラーを製造販売している国内メーカーの株式会社ケージーエスです。点字ディスプレイを小型化し、携帯用のブレイルノート

を販売。それをさらに進化させたのがブレイルメモです。本体に直接インターネット接続機能はありませんが、パソコンや Android スマートホンと Bluetooth 接続ができるので、点字ディスプレイとしてパソコン・スマホを操作できます。メーカー担当者によると、Android アプリのうち、Talkback で読み上げ可能なアプリのほとんどを操作できるそうです。長年に渡り製造・販売を行っているメーカーなので、熟練の愛用者が多く、メーカーのアフターフォローも充実しているのが特徴です。メーカー保証期間も安心の5年間です。



写真：ブレイルメモスマート Air 32（左）と Air 16（右）

これに対し、ブレイルセンスは韓国の HIMS 社が開発した製品を日本語版にし、独自の機能を追加したものです。日本での開発、販売を手掛けているのが点訳ソフトのメーカー、有限会社エクストラです。初代ブレイルセンスから Wi-Fi 接続を可能にしており、ウェブページの閲覧やメールの送受信ができます。最近では一般的にスマホやタブレットで利用されている Google マップや Apple Music, Podcast などのアプリも使えるようです。これ1台でタブレットを持ち歩く感覚で使用できます。キーの数も少なく、全体的にスマートな見た目となっています。

写真：ブレイルセンスシックス（左）とシックスミニ（右）

以下の表に、メーカーホームページの商品紹介ページに掲載されていた情報をまとめました。

商品名 項目	ブレイルセンス シックス	ブレイルセンス シックス ミニ	ブレイルメモス マート Air32	ブレイルメモス マート Air16
表示マス数	32 マス	20 マス	32 マス	16 マス
完全充電時の連続使用時間	18 時間	12 時間	約 15 時間	約 17 時間
重さ	705g	430g	約 650g	約 430g
価格	599,000 円	398,000 円	420,000 円	340,000 円
保証期間	1年間	1年間	5年間	5年間

実際の使用状況

本校で点字 ICT を愛用されている先生方にアンケートを行ったところ、ブレイルセンスを利用されている先生と、ブレイルメモを利用されている先生が半々でした。主にメモをとったり、点字文書の作成や編集、点字データの教科書を確認したり点字図書の読書に利用しているそうです。特にヘビーユーザーになると、音楽の録音・再生や時計、電卓、スケジュール管理にも使用されているとのことでした。

機器を購入するにあたり、他のものとも検討したそうですが、最終的な決定理由は使いたい機能があったり、近くに同じ機器を使用している方がいる点が挙げられました。

まとめ

情報機器の発展にともない、視覚に障害があっても自力でアクセスできる情報量は格段に増えました。その一助となっているのが点字 ICT です。単純に、音声ではなく点字で入出力ができる点で、会議中のメモや電話でのメモなどに便利だそうです。

用途や目的に合わせて多彩な使い方ができるので、まだまだ新たな使い方があるかもしれません。